

講 評

38回目を迎えた本展には、未来を担う子ども達の、たのもしい姿を感じ取る事ができる優れた作品が応募されています。

作品のテーマには、遊びを中心にイメージを発展させたもの、お話や本を読んで発想をふくらませたものなど多く見られました。植物や動物、魚などの観察から新しい発見を得たものや、想像の生き物や人間以外の生命体にも、優しい語りかけをした作品も増え、発想力や創造性が年々高まっているように感じました。また、近年の特色とも言える、地球や宇宙、自然現象としての虹などへの関心の深まりも喜ばしい傾向です。



審査会場では、審査員が集まって作品について話し合いがあります。例えば、雄勝小6年、菅原君の「地球が変!？」(左図を参考)という作品では、『水面が上昇する地球を描いているのかな?』

『日本の地図をしっかりと位置づけているね』などの審査員の感想が話し合われ、『特賞にしてはどうでしょうか.....賛成』というようにして審査が行われます。

世界の人類は未だに争いやテロを繰り返し、自然を汚染・破壊し、地球人としての生き方に対して答えを見出せない状況です。

今日の美術教育の理念は「感性を育てる」という、昭和22年に民間教育情報局(CIE)のもとで、つくられた当時の目標から、未だに脱していないのはとても残念です。世界の自由主義国では、描写力や鑑賞力等は美術教育のねらいからは遠ざかっています。新しい美術は、既成概念にとらわれない「多様性、独自性、創造性」に重心が移り、国を支える自由主義の根底になるとして、高等学校まで必須科目になっています。

本美術展は、子ども達の創造性を最も重視して審査を行っています。そのため、一般的なきれいさ、上手さ、正確さ、描写力等の既成概念ではない「これまで見られなかった絵画行為」に審査の視点をあてて受賞者を決めてきました。特賞作品の中から数点を紹介してみます。

神代小1年、藤肥さんの「にじがでた!」は、虹の上をとびまわる雲の形、女の子らしい繊細な人物描写と虹の動き(ムーブマン)にすばらしい表現力がみられます。神岡小2年、木村さんの「キングオブかめ」は、かめが動物と合体し、新生物のような生命が感じられます。縁取りをしない(アン・フォルメル)表現と泡(あわ)のような形の表現は、新鮮で独創性にあふれています。雄物川小3年、佐藤さんの「いるかの海と空」は、発散するような行動力と何事にもていねいで集中力にあふれた作品となっています。千畑小5年、小松さんの「にじの世界」は、アーチ型のにじのイメージを全く変え、ちりばめたような分散した形態の配置はこれまで見た事のない虹の表現です。中仙中3年、小松さんの「タイムトラベル」は抽象形態の中に緻密な模様を取り入れ、安定した構成になっています。角館中3年、金野さんの「心の中」は、絵の具をマーブリングしながら偶然の効果を狙った作品です。とても繊細で優れた現代絵画になっています。

国画会会員・秋田大学名誉教授
佐々木良三